

| | | |
|--------------|--------------------------------|-----------|
| 令和7年 3月3日 | 農作物病害虫発生予報 3月 | 山口県病害虫防除所 |
|--------------|--------------------------------|-----------|

～目 次～

| | | |
|-----|----------------|---|
| I | 予報の概要 | 1 |
| II | 予報 | |
| | 【主要病害虫】 | 2 |
| | 【その他の病害虫】 | 8 |
| III | 参考(予報の見方、気象予報) | 9 |

I 予報の概要

| 作物名 | 病害虫名 | 予想発生量 | 現 況 | |
|------|--------|----------|----------|-----|
| | | | 平年比 | 前年比 |
| タマネギ | べと病 | 平年並 | 平年並 | 少 |
| | 白色疫病 | 平年並 | 平年並 | 少 |
| イチゴ | 灰色かび病 | 少 | 少 | 少 |
| | うどんこ病 | 少 | 少 | 少 |
| | アブラムシ類 | 多 | 多 | 前年並 |
| | ハダニ類 | 平年並 | 平年並 | 多 |
| | アザミウマ類 | 平年並 | 平年並 | 前年並 |

お問い合わせ先

山口県農林総合技術センター(山口県病害虫防除所)

TEL (0835) 28-1211 (代)

FAX (0835) 38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

タマネギ

1 ベと病

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現 況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 平年並 | 平年並 | 少 | 発生前または発病初期 |

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年3.6%)、発病株率0%(平年0.4%)で平年並みであった(±)。

イ 1a当たり調査では、越年り病株の発生ほ場率0%(平年8.6%)、発病株数0(平年1.5)であった(-)。

ウ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 越年り病株の発病は4月頃まで発生するため、こまめにほ場を見回り、早期発見に努める。越年り病株を見つけた場合は直ちに抜き取り、ほ場外に持ち出すとともに、ビニール袋等に密閉するか土中に埋める等適正に処分する。

イ ほ場の排水を良好にする。

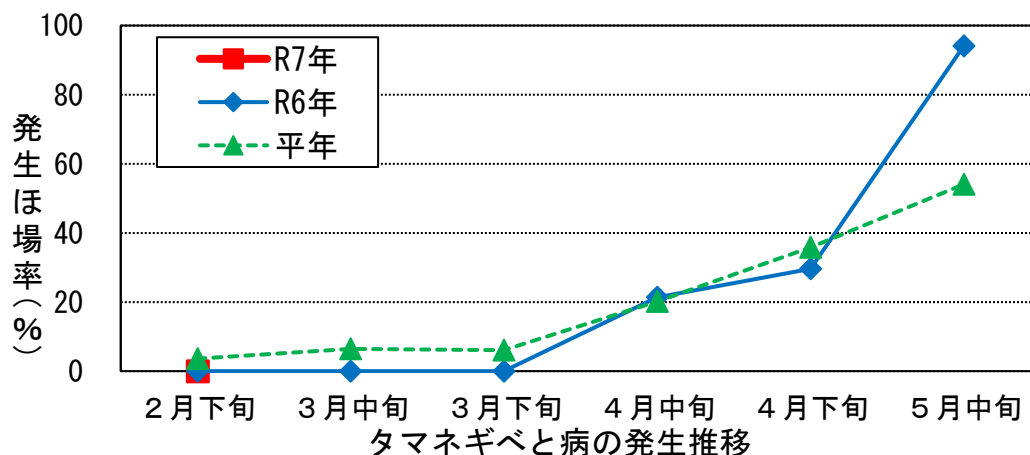
<防除のポイント>

ア マンゼブ剤(殺菌剤コードM03)、フルアジナム剤(殺菌剤コード29)等の保護殺菌剤で、定期的な予防防除を実施する。

イ 越年り病株、二次感染株が認められた場合は、直ちに治療効果のある薬剤(殺菌剤コード4, 11, 40等)で防除を行う。

ウ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

※本病に登録のある薬剤は混合剤が多いことから、同一成分の使用回数を超えないよう、必ず成分、殺菌剤コード及び散布記録等を確認してから使用する。



2 白色疫病

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現 況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 平年並 | 平年並 | 少 | 発病初期 |

(2) 予報の根拠

ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年4.3%)、発病株率0%(平年0.9%)で平年並みであった(±)。

イ 1a当たり調査では、発生ほ場率0%(平年6.8%)、発病株数0(平年8.4)であった(-)。

ウ 気象予報では、3月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

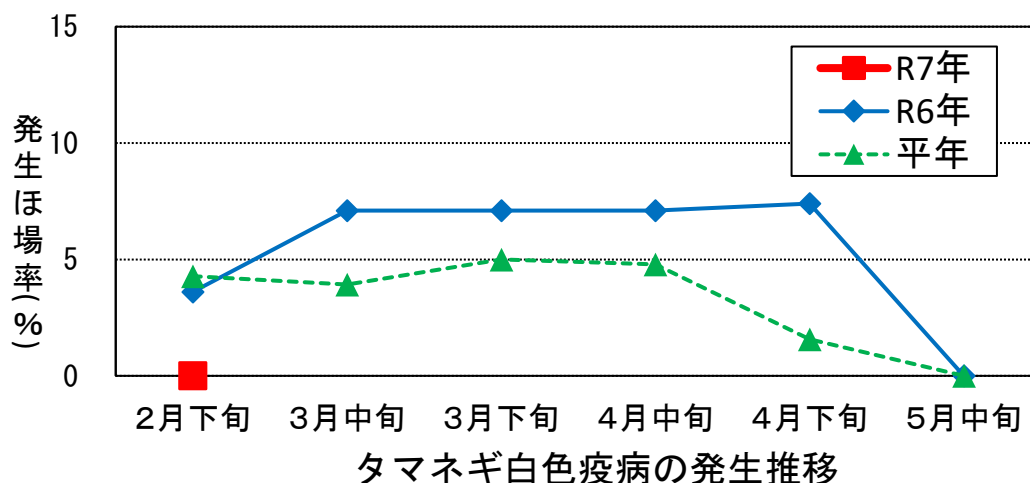
<耕種的防除等>

ほ場の排水を良好にする。

<防除のポイント>

ア ほ場の見回りを行い、発生を確認した場合は、治療効果がある薬剤(殺菌剤コード4、40及び43を含む薬剤)で直ちに防除を行う。

イ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、系統の異なる薬剤で追加防除を行う。



イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現 況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 少 | 少 | 少 | 発生初期 |

(2) 予報の根拠

- ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.0%（平成17.4%）、発病株率0.1%（平成1.6%）、発病果率0.0%（平成0.4%）で平年に比べ少なかった（－）。
- イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い、降水量はほぼ平年並（±）。

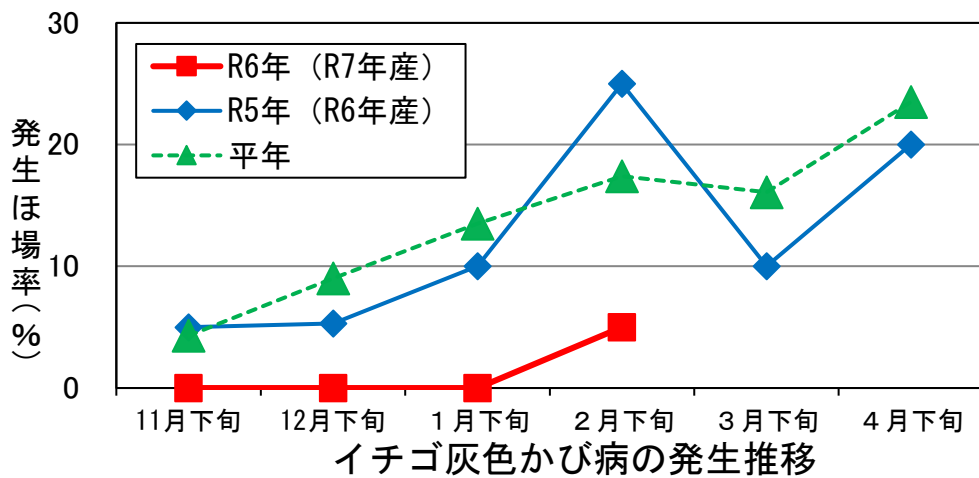
(3) 防除対策

<耕種的防除等>

- ア 多湿条件で発病が助長されるため、換気等により施設内が多湿にならないよう努める。
- イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、ビニール袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。
- ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

- ア ベンゾイミダゾール系剤（トップジンM）、ジカルボキシイミド剤（スミレックス、ロブラール）、SDHI剤（アフェット、カンタス）、QoI剤（アミスター）及びポリオキシシン剤は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。
- イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



2 うどんこ病

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 少 | 少 | 少 | 発病前または発病初期 |

(2) 予報の根拠

- ア 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平成10.5%）、発病株率0%（平成0.8%）、発病葉率0%（平成0.2%）、発病果率0%（平成0.1%）で平年に比べ少なかった（－）。

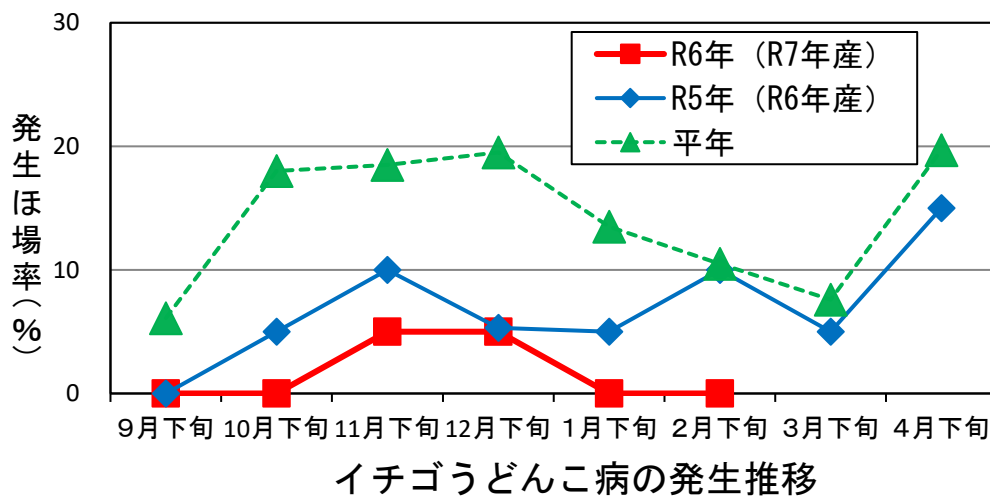
(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し適正に処分する。

<防除のポイント>

- ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。
- イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。
- ウ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1～2回薬剤を追加散布する。また、アズキシストロビン剤（アミスター）は耐性菌が出現しているため、効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。
- エ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 多 | 多 | 前年並 | 発生初期 |

(2) 予報の根拠

- ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率30.0% (平年17.0%)、寄生株率8.5% (平年1.9%) で平年に比べ多かった (+)。
- イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い (±)。

(3) 防除対策

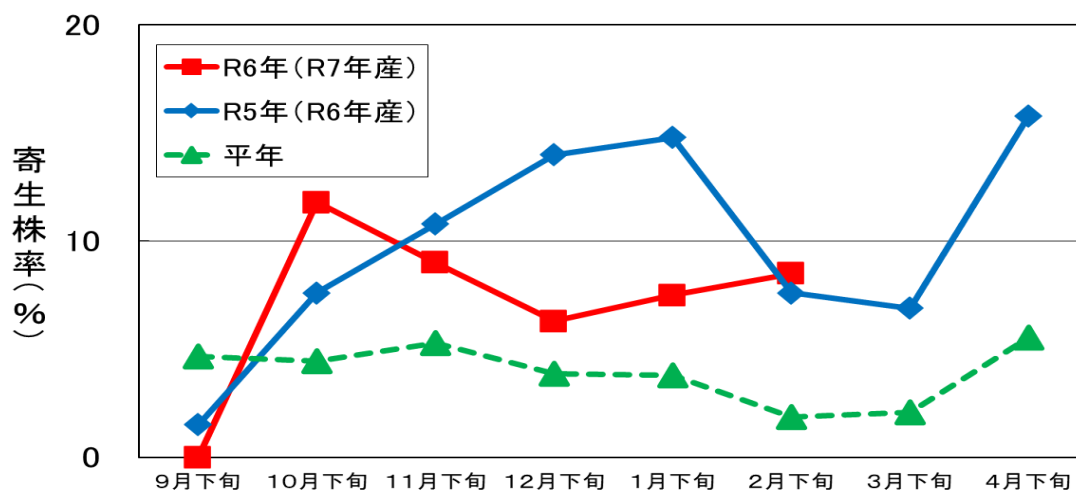
<防除のポイント>

- ア 現在、多発しているほ場では、速やかに防除を実施する。
- イ 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。
- ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- エ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

オ ハダニ類の天敵（ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ）を放飼している場合は、影響の少ない薬剤（サフオイル剤、ウララ剤、コルト剤、ベネビア剤等）を使用する。

（山口県農作物病虫害・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照）

（<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>）



イチゴ アブラムシ類の発生推移

4 ハダニ類

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 平年並 | 平年並 | 多 | 発生初期 |

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率30.0%（平年44.5%）、寄生株率9.7%（平年14.9%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さく確認しにくいため、ルーペを使用して葉裏を確認する必要がある。

イ 摘除した下葉10枚程度を白い紙袋に入れ、室内に1日おくと翌日にはハダニは新鮮な葉を求めて移動し、紙袋の上部に集まるため容易に観察できる。

ウ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵（ミヤコカブリダニ）を利用している場合は、次のことに注意して使用する。

（ア）天敵に影響の少ない薬剤（マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等）を使用する。

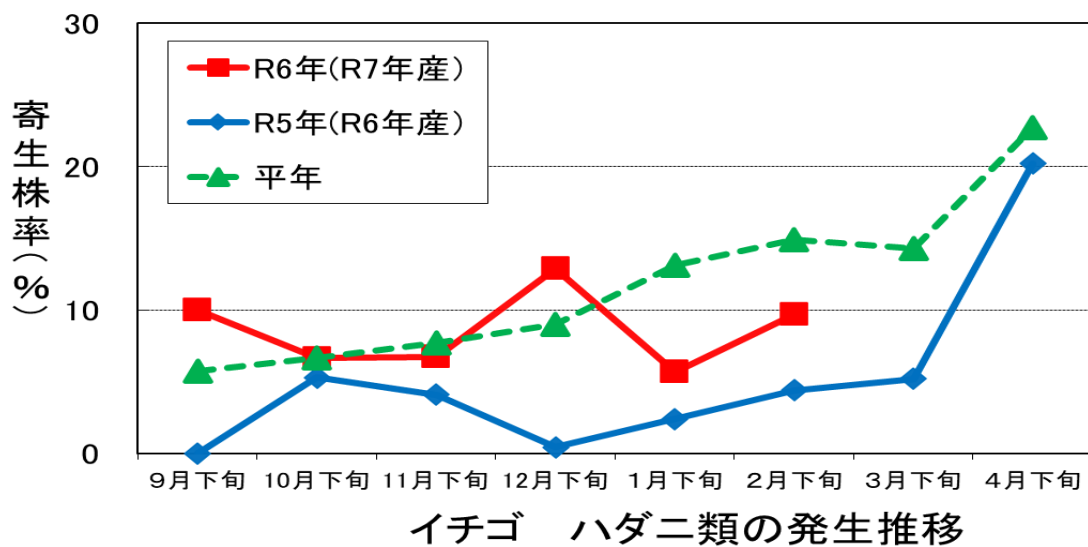
（イ）硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 開花期以降の薬剤散布は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

（山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照）

（<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>）



5 アザミウマ類

(1) 予報内容

| 予想発生量 | 現 況 | | 防除時期 |
|-------|-----|-----|------|
| | 平年比 | 前年比 | |
| 平年並 | 平年並 | 前年並 | 発生初期 |

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率25.0% (平年24.5%)、寄生花率1.4% (平年2.0%) で平年並みであった (±)。

イ 気象予報では、3月の気温は平年並か高い (±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア 気温が高くなると施設外からの侵入が増加し、施設内でも急激に増殖するため、こまめにほ場を見回り、寄生花率が10%を超えている場合には、直ちに薬剤を散布する。

イ アザミウマ類は体長2mm程度と小さく、花の中に潜っているため、息を吹きかけてルーペ等で確認する。

<防除のポイント>

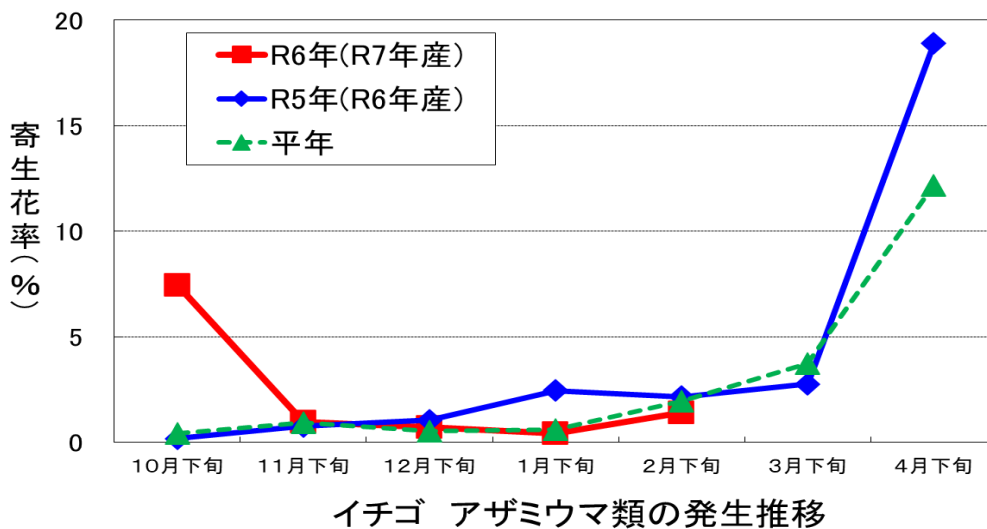
ア 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、他系統の剤に変更し、再度防除する。

イ 天敵・訪花昆虫に影響の少ない脱皮阻害剤（IGR剤、IRAC:15）は、幼虫の生育を阻害し、成虫は未ふ化卵を産むため次世代の発生を防止できる。

ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

（山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準－ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照）

（ <https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf> ）



【その他の病害虫】

| 作物名 | 病害虫名 | 予想発生量 | 現況 | | 発生ほ場率 | | 備考 |
|-----|--------|-------|-----|-----|--------|--------|----------------|
| | | | 平年比 | 前年比 | 本年 (%) | 平年 (%) | |
| イチゴ | 菌核病 | 平年並 | 平年並 | 前年並 | 0 | 0.5 | 発病茎葉、発病果は除去する。 |
| | コナジラミ類 | 少 | 少 | 前年並 | 0 | 23.3 | |

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

| | |
|-----|---------------------------|
| 多 | 過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生 |
| 少 | 〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生 |
| やや多 | 〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生 |
| やや少 | 〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生 |
| 平年並 | 〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの） |

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

| | |
|-----|---------------------------|
| 多 | 平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生 |
| 少 | 〃 前年の評価より少ない発生 |
| 前年並 | 〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの） |

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

| | |
|------|--------------------|
| 早 い | 過去10年間の平均値より6日以上早い |
| 遅 い | 〃 より6日以上遅い |
| やや早い | 〃 より3～5日早い |
| やや遅い | 〃 より3～5日遅い |
| 平年並 | 〃 を中心として前後2日以内 |

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較（半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

| | |
|---|--------------------|
| + | 発生を助長する要因 |
| ± | 発生の助長及び抑制に影響の少ない要因 |
| - | 発生を抑制する要因 |

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（2月27日福岡管区気象台発表）

| 予 報 | 低 い (%) 少 ない | 平年並 (%) | 高 い (%) 多 い |
|-------|-----------------|---------|----------------|
| 気 温 | 20 | 40 | 40 |
| 降 水 量 | 40 | 30 | 30 |
| 日照時間 | 30 | 40 | 30 |

週ごとの気温傾向

| 予 報 | 低 い (%) | 平年並 (%) | 高 い (%) |
|---------|---------|---------|---------|
| 1 週 目 | 10 | 20 | 70 |
| 2 週 目 | 20 | 50 | 30 |
| 3～4 週 目 | 30 | 40 | 30 |